

学域横断的プロジェクト入門《2024》

#5 グループワーク3：リサーチプロポーザル2

荻谷 千尋・田中 千晶・中野 正俊

Wed, 10, Jul, 2024

I. 前回の振り返り

- 前回の「授業の感想」（別紙参照）

II. 先行研究のまとめ方

1. 要約の仕方

- 要約：著者の設定したサーチクエッション、または中核的な議論に従い、**自分の言葉で再構成**すること
 - 著者の議論を明確化するために、議論を、自分の言葉で補うことが必要
 - 闇雲に文章を短くしたり、引用を繰り返すだけでは、要約にならない

1. 著者を紹介する

- 何の専門家なのかを読み手に示す
 - ディシプリンやサブディシプリン
 - 所属（〇〇大学）は必要な情報ではない
- 敬称略（＝呼び捨て）

1. 著者の意見と、要約者の解釈の区別

- 著者の主張が明確になるよう、必要に応じて、主語を著者とする
例：行政学者の水口（2011）は、「何でも説明できるものは何も説明していないのと同じことである」（水口 2011: 99）と述べ、森の定義の曖昧さを批判する。

1. 議論の序列化

- 著者が何を強調しているのかを明確にする
例：行政学者の牧原（2017）がもっとも重視するのは、●●であって、一般的に重要視されている〇〇を、検討の対象から除外する点に彼の議論の独創性がある。

1. 議論の構造化

- 著者がある現象をどのような概念を用いて分節化しているかを明確にする
例：行政学者の真淵（2020）は、●●の機能に着目することで、〇〇制度の特徴を次の3点に分類する。

- 別紙、新聞書評も参照¹

2. 注意点

以下のような先行研究の引用、参照は、不誠実な態度である

1. 挙げ足取り

- ・議論、主張、論拠の一部分のみを捉えて、全体を批判する
 - 「揚（げ）足上（げ）足を取る」「人の言った言葉じりや、ちょっとした言いまちがいをとらえて、大げさに批評したりする」（『新明解国語辞典』第8版）

1. 矮小化

- リサーチクエッションや論文全体の論旨を尊重せず、主張や議論を些細な問題に見せかける

2. 我田引水

- 自分にとって都合が良い箇所のみを強調
- 「我ワが田に水を引く意」強引に自分の都合のいいように計らうこと（『新明解国語辞典』第8版）

3. レッテル貼り

- 先行研究の丁寧な読解を怠り、科学的と言うより、政治的な態度で先行研究を評価
 - 「人にレッテルをはる〔=先入観をもって、ある種類のマイナス評価をくだす〕」（『新明解国語辞典』第8版）

III. 引用と参照、参考文献

1. 剽窃・盗用を疑われないようにするために

- ・第三者が読んだときに、先行研究の著者と引用者（＝レポートの執筆者）を、正しく区別できるような書き方をすることが大切
- 1. 主語を著者とする、もしくは、伝聞や推測を表す文型を用いる（～によれば）
- 2. 直接引用の場合は、「」で囲む
- 3. 直接引用、間接引用、参照のいずれの場合も、文末で出典を示す（著者名 出版年: ページ数）
- 4. 著者を紹介する。通常、研究領域、テーマで示す（所属先は書かない）。

2. 文献リスト

- ・執筆時に参考にした文献を網羅する
 - 読者＝第三者（アカデミック・コミュニティ）が、論文内容を検証できるようにする
- ・リストの表記方法
 - 執筆にあたって参考にした文献、Webサイトを列挙
 - 邦語文献：著者名を基準とする50音順
 - 欧語文献：著者名を基準とするアルファベット順
 - Webサイト：運営主体（機関）を基準とする50音順
 - 場合に応じた具体的な表記法については、別紙（Master of Writing（立教大学））参照

注意事項 | 紙媒体とWeb媒体

- ・紙媒体・Webの両方で公開されているものについては、紙媒体の表記を優先する
 - CiNiiやJSTAGEから論文をダウンロードした場合も、URLは書かない（紙媒体の表記法のみを記載）

- 新聞データベースから新聞をダウンロードした場合も、URLは書かない（紙媒体の表記法のみを記載）

IV. リサーチエッション（研究目的）

- できるだけ具体的な日本語で表現することが重要（後述）
- リサーチエッションは、**狭く深い**ものが望ましい
 - なぜ、いつ、どのようになどの疑問副詞を使うとよい
- よくないリサーチエッションの例
 - 現代日本の少子高齢化の現状と課題を検討する
 - ➡ ダメな理由：目的が広過ぎる
 - 仮想通貨とは何か
 - ➡ ダメな理由：簡単に調べればわかる

1. リサーチエッション：答えられることと問うに値すること

(1) 答えられる問い

- 能力；時間；字数の制約を考慮する
 - ➡ 問題意識とリサーチエッションの区別
 - 初学者は混同しがち
 - ➡ 答えを導ける形式（表現）である必要がある
- 答えられる問いにする
 - ➡ 大きな問いと小さな問いを組み合わせる（後述「問題を細分化する」）

Note

今回は仮のリサーチプロポーザルです。もし、仮に、来年1年間、このメンバーで研究を続けるとして、できそうな範囲で考えてみましょう

(2) 答えるに値する問い

- 個人的な問い；学術的な問い；社会的な問い
1. 個人的な問い：好奇心をもって取り組める課題
 - 自分が面白いと思えることがまずは大切
 2. 学術的な問い：学界の共有知（わかっていること／わかっていないこと）を踏まえる
 3. （社会的な問い：社会的な問題関心を意識する）

2. 「問いのフィールド」を作る

1. 研究テーマとリサーチエッション

- 研究テーマ：漠然としていてもよい
- リサーチエッション（問い）：解答可能な命題である必要あり

Note | 研究テーマとリサーチエッション

- 研究テーマを決める作業と、リサーチエッションを作る作業は、まったく別のもの
- リサーチエッションが漠然としていいると、論文も雑になりやすい
- 読み手（教員・研究者）は、リサーチエッションに論文が答えているかどうかを確認しながら読む

2. 「問題を細分化する」

- アウトラインを作る
 - セクションごとにサブクエッションを設ける

小さく絞り込んだ問題は、どんどん深めることができる。深まっていくと、逆に広がりも出てくる。〔略〕漠然とした大きな問いのままだと、結局何も書くことができず、苦勞することになる（戸田山和久（2022）, 76ページ）

一つ一つのサブ問題は、問題が明確で、範囲が限定されていることから、答えを出しやすい。こうしたサブ問題に答えることを通じて、最初の大きな問題への答えが得られる。こんな具合に、アウトラインを作るというのは、大きくて漠然として問題を、それぞれ手持ちの材料で答えが出せるいくつかの比較的小さなサブ問題に分け、そのサブ問題にすべて答えると、最初の大きな問題に答えたことになる、という具合に問題を整理・配置することにほかない（戸田山和久（2022）, 134ページ）

3. ぶつける問いと取り出される問い

- 「日本の科学技術における研究力低下問題について論ぜよ」
 - 日本の科学技術研究力は**本当に**低下しているのか
 - **どのような**過程を経て研究力が低下してきたのか
 - 研究力低下の原因は**何か**
 - 研究力が低下すると**どうなる**のか
 - **どのように**して研究力を回復させたらよいのか

Tip

テーマから、リサーチクエッションへ：疑問副詞を活用しよう

4. 「問いのフィールド」から「問いと答えのフィールド」へ

答えのフィールド

- 予測（期待）
 - 研究力低下の原因は何か ➡ 大学教員の忙しさ
 - 未知の症状の原因は何か ➡ 未知のウイルス
- 仮説（if-then）
 - 実験
 - シミュレーション(予測モデル)

5. フィールドからアウトラインへ

構想段階

- 問いと答えのフィールドを膨らませる
 - 問い ➡ 問い／問い ➡ とりあえずの答え ➡ 問い
 - リゾーム状の構造

執筆段階

- 問い ➡ （サブ問い ➡ サブ答え/補足説明） ➡ 答え
- リニアな構造（部分順序）

調べたことや、フィールドに描かれたことのすべてを論文に盛り込もうとすると間違いなく破綻する（戸田山和久（2022）, 146ページ）

V. グループワーク

- 先行研究のまとめ方、リサーチクエッションについて、あらためて考えてみましょう

- 来週は授業がありません。また、本日と最終授業日（プレゼンテーション）を除いて、あと2回しか授業がないことも考慮して下さい

VI. 次回までの宿題

1. 授業の感想

回答先と締め切り

- 回答先：Google Forms
- 締め切り：2024年7月14日（日）23時59分

2. リサーチ・プロポーザルのドラフト

提出物と締め切り

- 提出物：印刷したものを3部（教員提出用）
- 締め切り：2024年7月24日（水）授業時間内

引用文献

戸田山和久（2022）『最新版 論文の教室：レポートから卒論まで』，NHK出版.

1. 書評『文部科学省』 青木栄一著・犬塚元評（『朝日新聞』2021年5月1日）↔